

## 相場格言 3

### もうはまだなり      まだはもうなり

「人の行く裏に道あり花の山」と並んで、格言の双璧とっていいほどよく口にされることばです。相場をこころざす人はほとんどがこの言葉を口ずさんで今日に至っているような気がします。言葉の意味は、**もう**底だと思えるようなときは、**まだ**下値があるのではないかと一応考えてみなさい。反対に、**まだ**下がるのではないかと思うときは、**もう**この辺が底かも知れないと反省してみてもどうか というものです。つまり、微妙な相場の変化に対して、自分だけの独善的な判断をふり回すことが、いかに危険であるかを説いたことばといえるでしょう。事実、心の中でまだ買うのは早いと思っているときに相場は上がっていき、まだ上がるだろうと思っていると下がってしまう。そういう経験をお持ちの方は多い事でしょう。投資家の心理と相場の行き違いをズバリ言いあてた格言として、実用価値は十分ありそうです。

### 押し目待ちに      押し目なし

買おうと思うが株価は上がる一方。とはいうものの、どうせ一本調子には上がらないだろう。一度は下がってくるときがあるだろう。そこで買おう というのが、押し目待ち。しかし、相場の勢いが強いときには、なかなか望みどおりに下がってくれないものです。結局「**押し目待ちに押し目なし**」となり、相当高くなってから買ったり、あるいはついに買いを諦めざるをえないことになります。また押し目待ちの気持には、最初買おうと思った値段にこだわる傾向があります。だから、かりに押し目があったにしても、小幅であるときには「もう少しで自分の考えていた値段まで下がる」と考え、せっかくの買いチャンスを逃がす場合も多い。その反対に、下げ相場になって売りそこなった人が、少しでも高く売りたい気持から戻りを待つが、その期待もむなしく相場はどんどん下がり、ついに売れなかつたり大底で投げる羽目に陥る。これが「**戻り待ちに戻りなし**」となります。押し目と戻りについては「**初押しは買い、初戻りは売り**」という格言もあり、いわば経験法則とでもいうべきものですが、どのような場合にでも必ずあてはまるとは限りません。押し目と戻りの性格を的確に把握したうえで、この格言を応用すべきだと思います。たとえば本格的な上げ相場での初押しとか、長い上げ相場に転換期がきて下げ過程に入ったときの初戻りなどには、この格言が有効となるでしょう。

## 二度に買うべし 二度に売るべし

自分の判断が本当に正しいかどうかは、結果をみてみなければわかりません。買ってみるか、売ってみるかして、さてどういう結果が出るか。当たりか、それともはずれか。いくら自信があっても、相場がその通りに動く保証はありません。これまでも繰り返し述べて来た通りですが「相場は相場に聞け」ではありませんが、まず相場にさぐりを入れる。つまり打診をして、自分の判断の当否を確かめてみてはどうでしょうか。その結果、予想どおりであることがわかったら、そこではじめて本格出動してもまだ十分に間に合うはずです。一度にどっと出て行って失敗することを考えれば、このくらいの手間ヒマは惜しむに値しないでしょう。いわば、石橋を叩いて渡るがごとき慎重さが、株式投資には何よりも必要となります。「二度に買うべし、二度に売るべし」は、その慎重さを説いた教訓と言えるでしょう。と同時にこの教訓は、一度目の買いで得た自信と確信が二度目の買いを力強く支え、したがって思い切った行動がとれる基盤となる効用も説いているのです。

買ってみたくなったら、まずほんの少しだけ買ってみる。相場が上がらなければ、だまって待てばよいし、十分な上げの手応えを感じたら全力を投入すればよい。売りはその反対で、ある程度高値にさしかかったと思ったら、ちょっと売ってみる。下がらない。待ってみる。またちょっと売ってみる。まだ下がらない。待つ。さらにまた売ってみる。今度は下がりをはじめた。そこで全部を売り切ってしまうという寸法。実際には「二度に」ではなく、三度でも四度でも打診をつづけ、確信がもてたら、全軍を出撃させることです。「相場は明日もある」。じっくり構え、慎重に行動するにこした事はありません。

## 三割高下に向かえ

相場が上がれば、際限なく欲の爪をのばし「とことん上がるまで売るもんか」というタイプの投資家が多いのですが、その欲がわざわいして、取れるものも取れず、あまつさえ損勘定になってしまう例も多いようです。そこで、あらかじめ目標をたてておき、何割上がった後はどうあろうとも利食い売りしよう、とする戦法があります。ただし、これは波乱含みの相場には通用しにくい面があり、普通の穏当な値動きのときだけに应用すべきだと言えます。たとえば百円の株式を買ったら三割高の百三十円で売るわけで、いわば投資資金の効率（回転率）を高めよという教えでもあり、むろんこの戦法をとる限り、余計な迷いを寄せつけないという効用もあります。

そうした個別の株式に対する戦法を教えるほかに、相場全体の動きを把握する意味も持っており、つまり「三割」というところは、上げにしても下げにしてもひとつの転機になるというものです。したがって、ある出発点から三割上がったところは売り、三割下がったところは買いのサインとみるわけです。二割、三割の高下（高安）まではその相場の流れにしたがうのが自然というべきでしょう。

## 売りは早かれ 買いは遅かれ

株式投資では、買いはやさしいが売りはむずかしいといわれます。「売り上手こそ、相場上手」ともあり、売りが上手になれば、投資家として超一流の力量と認められます。「天井三日、底百日」にもいとうとおり、買い場は随所にありますが、売り場は短かい場合が多い。それだけに買いはじっくり構えたほうがかえって安く買えることもあります。売りのほうは一瞬のチャンスをつかむがごとく迅速に行動すべし・・・それが「**売りは早かれ、買いは遅かれ**」の意味となります。

だいたい売りの場合は、利が乗っていればいるほど、もう少しもう少しと欲張ってついチャンスを失するばかりか、損失勘定になってしまうこともあり、画餅は食えないものです。幅は小さくとも儲けは儲け、瞬時のチャンスがあればサッと売り、利益を現実のものとして自分の手中におさめることが必要となります。その利益を投資資金に繰り入れて、再びつぎの機会をねらえばよいのであり、買い場はいくらでもあるのです。悠然と構えることが大事なのかもしれません。

株式格言は非常に数多くありますが、ここに収載できたのは、ごく一部です。しかし、この程度でも株式投資とは何かを、いづらか感じとっていただけたものと思います。株価は、つねに上がるものとは限りません。どんな優良株といえども値下がりする時がありますし、あるいは株価が全く動かなくなるときもあります。相場とはそういうものであると考えて行動する事が非常に重要といえます。投資家はいつもこれを念頭において、株式投資に臨まなければなりません。どういうときに、どういう心構えが必要かを、これらの格言から学びとり、これからの投資に役立てて頂きたいと思います。株式投資に成功する不変の真理は「安いときに買って、高くなったら売る」ことです。しかし、いつ買えばいいのか、いつ売るべきなのか、その判断はなかなかつけにくいものです。確信を得るためには、何よりも十分な調査と検討が必要であり、その基礎となる精度、確度の高い情報をもとに、客観的な分析を行う必要があります。十分な検討を重ね、的確な判断が得られたら、あとは実際の行動を起こすのみです。ところが、この期に及んでもなお逡巡し、行動に踏みきれない人も多く、決断にはたしかに勇気が必要ですが、勇気がなければ財産は作れません。その勇気を生むものが心構えと言えるでしょう。心構えができていないか、結果には大きな差が生じるものです。客観的な情報と投資家の勇断、この要素が二つながらに絡みあって相乗効果をあげてこそ、株式投資での成功の道が開けます。むろん、その支えとなるのが心構えといえます。この心構えをつくってくれる「よき助言者」が、古来言い伝えられている相場の格言、金言の数々でしょう。古人が終生かかって築いた境地のエッセンスが、そこにあります。これを会得することによって、投資家は労せずして古人の水準に到達できるわけです。しかも、これらの格言が生きているのは、決して相場の世界だけではなく、そのまま人生の教えとして通じるものも多くあり、株式相場が人間心理の相剋の場であるといわれることから、うなづける事でしょう。沈着にして冷静、剛毅にして果断、旺盛な気力と動じない胆力、そして限りない知力をもってことにあたれと、格言は教えています。そのいうところをマスターすれば、株式投資ばかりか人生においても、あなたは成功への道を歩むことができる事でしょう。